

自己点検・評価報告書

令和 7 年度 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム(応用基礎)

1 評価体制について

鳴門教育大学・学校教育学部教務委員会は、「教育課程の編成及びその実施」、「内部質保証」に関する事項を取り扱うこととしており、本プログラムの推進について議論・評価を行う。

2 学内からの視点

2.1 プログラムの履修・修得状況、学修成果に関する事項

本教育プログラムは1年次必修の「基礎情報教育」と、2年次選択必修の「実践情報教育Ⅰ」、「実践情報教育Ⅱ」、「実践情報教育Ⅲ」(1科目を選択)で構成している。2年間で実施されるプログラムのため、令和6年度の基礎情報教育の履修者で、かつ令和7年度の実践情報教育Ⅰ～Ⅲの受講者を本教育プログラムの新規履修者とする、110名である。プログラム履修率(履修者数÷収容定員:400名)であることから、履修率は215名/400名=約54%である。

履修登録者に対する単位取得者の割合は約93%と高水準にある。1年次の基礎情報教育情報工学・情報教育・数理科学・教育評価をそれぞれ専門とする複数の教員で、座学の15回と演習の15回を担当している。特に、演習ではクラス分けを行い、少人数体制による学びの充実を図っている。また、2年次の実践情報教育Ⅰ～Ⅲでは、基礎情報教育と同様に、少人数体制で演習に取り組めるようにクラス分けをしている。

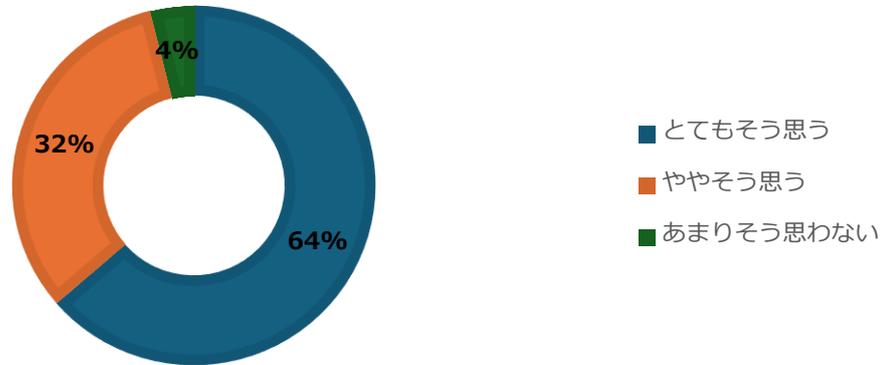
2.2 学生アンケート等を通じた、学生の内容の理解度

実践情報教育Ⅰ～Ⅲの受講者を対象とした独自アンケートの結果から、講義への満足度、将来性について、いずれも高い評価を得たことが明らかとなった。当該科目を通じて、データサイエンス領域からはデータの扱い方、AI領域からはAIについての理解に対する回答が、65%以上と高水準であった。学生アンケートの自由記述を分析したところ、講義資料を読み込めば自身の力で解決できるように設定されていたこと、自分のペースで進められるように設定されていたことが良かった点として報告されていた。一方、活動によっては、より詳細な授業資料があった方が良い、ペースが早かったなどの意見も見られた。次年度には、授業資料の改善とMoodleを利用した事前学習のあり方を検討する。

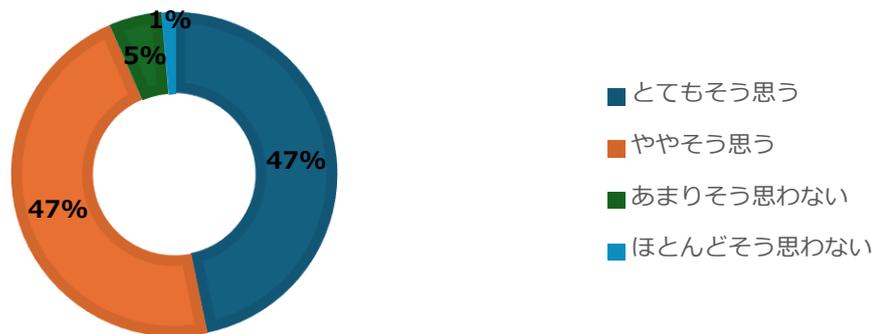
2.3 学生アンケート等を通じた、後輩等他の学生への推奨度・履修率向上に向けた計画

本プログラムを構成する授業科目「基礎情報教育」は1年次の必修科目、「実践情報教育Ⅰ」、「実践情報教育Ⅱ」、「実践情報教育Ⅲ」は2年次選択必修であることから、「後輩等他の学生への推奨度」および「履修率向上に向けた計画」は自己点検・評価の対象外とした。

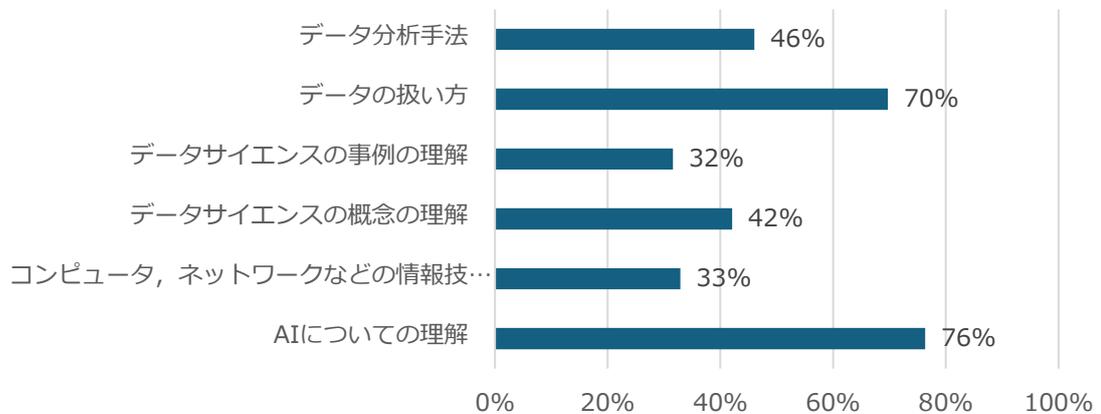
総合的に評価して、この授業は満足できるものであった。



本講義で得られたデータサイエンスの知識が、
あなたの将来に活かせるものであった。



あなた自身が身についたと思うことを選んでください



3 学外からの視点

教育プログラム修了者の進路・活躍状況、企業等の評価として、令和 7 年 3 月の時点で、本プログラムを修了した卒業生はいない。令和 9 年度以降の卒業生調査において、本教育プログラムを修了した卒業生の進路先や活躍状況の把握が可能である。

4 改善・進化に向けた取組

4.1 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムを構成する授業科目「実践情報教育」では、授業担当者間で内容と実施方法を共有・点検し、学校教育の観点から数理・データサイエンス・AI 等を学ぶ意義が理解できるように、継続的に見直しを行っている。今年度は、基礎情報教育で学んだ内容を教育実践に接続できるように、データ活用や AI 活用を演習に取り入れ、授業内での適用場面を明確にした。引き続き、教育におけるデータ活用の推進に資するよう、演習内容と教材の改善を進める。

4.2 内容・水準を維持・向上しつつ、「分かりやすい」授業とすること

学生の授業評価アンケートを踏まえ、内容・水準を維持しつつ「分かりやすい」授業となるよう改善を継続している。今年度は、演習を通じた理解促進や教員の支援が評価される一方、進度や難易度に関する受け止めの差、プログラミング (Python) や一部ツール操作における理解のつまずきが見られた。これを踏まえ、段階的な課題設計、学習支援の導線整備 (ヒント提示・相談機会の確保等) を行い、理解度差に配慮した授業運用を進める。併せて、「数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム四国ブロックシンポジウム」等への参加を継続し、最新の知見を授業改善に反映する。